

アメリカにおける「自己啓発本」の系譜

尾崎 俊介

あなたを取り巻く世界、あなたが現在置かれている状況は、すべてあなたの思考が創り出したものであり、もしそれを変えたいならば、理想の現実を思い浮べ、そのようになれと命じるだけでいい。なぜならこの宇宙は創造的なパワーを秘めた可塑的なエーテルのようなものであり、そこに人間が思考の形で命令を下すと、その命令通りの現実が形となり、命令を発した者の元に引き寄せられてくるからだ——。突然このように言われたとしたら、ごく普通の常識人からすれば、どう見てもオカルト的な新興宗教の勧誘か、あるいは新手の詐欺の手口かと思えるだろう。ところが、そうではない。実はこの言説、19世紀末のアメリカで流行した「自己啓発本」と呼ばれる文学ジャンルの中で主張されるや、たちまち膨大な数の読者の支持を得、以来今日に至るまで延々100年以上に亘って主張され続けている立派な「思想」なのだ。

否、アメリカだけではない。今日、自己啓発本なるものは、イギリスにおいても、また日本においても膨大な点数が出版され、それぞれ版を重ねていて、不況と言われる出版業界の中でも例外的な活況を呈している。そしてその自己啓発本の多くが上に述べたような言説、すなわち、宇宙とはいかなる形をも取り得るエーテル状の物質であり、人間が「思考」によってその物質に働きかければ、それは思う通りのモノとなって思考した人間の元に引き寄せられるという言説を「科学的な事実」として伝えつつ、世界は、そして未来は、自分が望む通りのものに変えられるのだから、自らの意志をもって理想の世界／未来を作り上げよう、というポジティブなメッセージを発信し続けているのである。

ならばこの何とも奇妙な自己啓発本特有の「ポジティブ思想」は一体どこから、どのようにしてやってきたものなのだろうか？

セルヴェトゥスとスウェデンボルグ

先に述べたように、自己啓発本なるものが広く流布し始めるのは 19 世紀末のアメリカにおいてなのだが、しかしその起源をさらに遡れば 16 世紀スペインの異端の神学者ミカエル・セルヴェトゥス (Michael Servetus, 1511-1553)、そして 17 世紀末のスウェーデンに生れた科学者であり思想家であるエマニュエル・スウェデンボルグ (Emanuel Swedenborg, 1688-1772) に辿りつく。今日アメリカやイギリスで、そして日本で流行する自己啓発本のバックグラウンドとなる思想を知るために、まずはこの二人の特異な神学思想から見て行こう。

セルヴェトゥスの神学の特異な点は、彼がニカイア公会議 (325) 以降、キリスト教の根幹を成す教義として定まった「三位一体」の概念に異を唱えたところにある。彼は「人格神」の概念を、すなわち『父』なる人格を持った神」という概念を否定し、宇宙の全実在が神そのものであると考えた。それゆえ彼は神を「父」「子」「聖霊」の三つに分割するという考え方を拒絶するのだが、その代り神は三つの位相で自己を表現する、という風には考えていた。「宇宙の全実在」たる神は、「エネルギー (=キリスト)」によって世に発現し、その発現は「光 (=聖霊)」によって充実する、というのだ。

またセルヴェトゥスの神学によると、全宇宙そのものが神ということになるので、神と人間との関係について言えば、人間は「神の被造物」というよりは、むしろ「神の一部」ということになる。だから人間は存在そのものが神聖であり、従来のキリスト教にあったような「人間は絶対者たる神の前で罪深く、塵のように取るに足らぬものである」という考え方はセルヴェトゥスにはない。またセルヴェトゥスの神には人格がないので、人間に対して怒ったり罰したりしないし、そもそも宇宙の全存在たる神が「善」である以上、この世に「悪」などというものは存在しない。彼にとって「悪」というのは、単に「光の不在」でしかないのだ。¹

無論、このような異端的な神学を公にしたセルヴェトゥスは、火炙りによる処刑を免れなかったのではあるが、しかし彼のこの斬新な思想は、二つの側面において、後の自己啓発本の誕生に大きな影響を与えることになる。

一つは、セルヴェトゥスが「人格神 (=父なる神、怒る神)」及び「悪」の

存在を否定したことによって、従来のキリスト教が繰り返し説いてきた「原罪」とか「神の罰」といった概念が無効化されたということであり、それは換言すれば、原罪意識に慄き、「予定説」が説く「滅びに至る運命」に怯えていたキリスト教徒にとって、その恐怖の軛から解放される可能性が示されたということである。また「人間は全宇宙（＝神）の一部であり、宇宙と直接つながっている」というセルヴェトゥスの思想を敷衍すれば、「人間は、自分の意志で自分の体を動かせるように、思考によって宇宙の在り様を変えることもできるはずだ」という考え方も導き出せるのであって、この二つの側面を合わせれば、本論冒頭で紹介した自己啓発本の主張が概ね準備されてしまうことは明らかだろう。セルヴェトゥスの神学が今日の「自己啓発思想」のルーツであるとされるのは、このゆえである。

そしてこのようなセルヴェトゥスの異端的神学を受け継ぎ、キリスト教の教義をより人間主体のものに書き換えるのに大きな役割を果たしたもう一人の異端者が、17世紀末のスウェーデンに現われた科学者／思想家であるエマニュエル・スウェデンボルグであった。

天文学者でもあったスウェデンボルグにとって、その神概念と宇宙観は密接につながっている。セルヴェトゥス同様、スウェデンボルグもまたこの宇宙にあるすべてのものが神の一部と考えていたが、彼によれば、その宇宙の中心には「始原の太陽」があつて、これが光・熱・活動力・生命・モノの根源であるという。そして宇宙に散在する他の小さな太陽はこの始原の太陽の中継基地であり、地球を含めた無数の惑星は、この中継的な太陽を通じて始原の太陽からのエネルギーを受け取っている。その意味で、この始原の太陽こそが「神」と呼んでいいものであって、地球上に住む人間はすべてこの始原の太陽（すなわち神）からのエネルギーの「流入」によって生命を得ているし、人間に限らずこの世に存在するものは、動物であれモノであれ、すべて同じ原理で存在している。またそうである以上、神が悪いものを流入させるはずがないので、この世には「悪」も「罪」も存在しない。

スウェデンボルグのこのような宇宙観に基づいた神概念からすると、神はエネルギーの根源でこそあれ、「人格を持った何か」ではないので、セルヴェトゥスの神同様、人間に対して怒ったり罰したりしないし、自ら発したエネ

ルギーの流入を受け入れるすべての人間を恵み深く扱う。また宇宙の一部たる人間もまた神の一部であり、それゆえ生まれながらに「善」を愛するところがあるので、その根源的な性質に素直に従って法を守り、隣人を愛し、与えられた報酬以上に働けば幸せになれるし、その時点ですでに人間は天界で暮すのと同じということにもなる。つまりスウェデンボルグの言う「天国」とは、他でもなくこの地上にあってしかるべきものなのだ。だからこそこうした「科学」に裏打ちされた新しい神学が、従来のキリスト教の教義に代わって広められなくてはならないし、またそれを広めることが聖書の黙示録に示された「新エルサレム」の建設の真の意味であると、スウェデンボルグは考えていた。²

このように概観してみると、人格神の存在を否定した上で、我々人間は宇宙に存在する他のあらゆるものと同様、霊的存在としての神からエネルギーの流入を受けてこの世に現出しているのであって、それゆえこの世には「原罪」もなければ「悪」もないとするスウェデンボルグの思想は、セルヴェトゥスの神学と共通する部分も多く、その延長線上にあることは明らかであるが、スウェデンボルグの場合に特に顕著なのは、真つ当な手段で得られた富や名誉はまさに人間が生きる目的でもあって、禁じられるべきであるどころかむしろ奨励されるべきものであるとしていることである。スウェデンボルグは、善良かつ勤勉な人間がこの世の幸福を享受することを明確に肯定しているのだ。そしてこの「現世における幸福の肯定」という側面こそ、スウェデンボルグの思想がセルヴェトゥスの神学と並んで現代の自己啓発思想のルーツとされる所以なのである。

「ニューソート」とアメリカ

とはいえ、「金持が天国に入るのは、駱駝が針の穴を通るより難しい」（『マタイによる福音書』19章24節）と教えるキリスト教の禁欲的な教義と、現世における幸福を肯定するスウェデンボルグの思想が相容れないのは容易に想像できるであろう。実際、スウェデンボルグは従来のキリスト教の教義、とりわけ禁欲主義の強いカルヴァン派の教義に対して生涯を通じて激しい呪詛を投げかけているし、その結果として彼は異端と見做され、母国ス

ウェーデンを追われて晩年をイギリスで過すことにもなったのだが、そのことは逆に言えば、カルヴァン主義的な禁欲主義が社会の道德律として広く厳格に受け入れられているキリスト教社会であればあるほど、それに対する一種の解毒剤として、スウェーデンボルグの思想がもてはやされる可能性があるということでもある。

だからこそ 19 世紀も後半に差し掛かった頃、工業化の進展によって「金ぴか時代」とも呼ばれる好景気時代が到来する一方、「大覚醒時代」を背景としてカルヴァン主義的な禁欲主義の機運が広まり、金ぴか時代の拝金主義的な風潮を厳しく批判する勢力が強かったアメリカ社会において、スウェーデンボルグの思想は、そうした禁欲主義へのアンチテーゼとして支持されていくのである。と同時にこの思想は次第にスウェーデンボルグという個人からは切り離され、従来の禁欲的なキリスト教の教義とはまったく異なる新しい思想、すなわち「ニューソート (New Thought)」という名称の下に一般化されて、様々な道筋を取りながらアメリカ社会の隅々にまで行き渡り、根付いて行くこととなる。

例えば、ニューソートのアメリカ流入の道筋の一つとなったものに「クリスチャン・サイエンス」がある。

1879 年にアメリカで創始された医療系宗教団体「クリスチャン・サイエンス」の基礎を築いたのは、フィニアス・パークハースト・クインビー (Phineas Parkhurst Quimby, 1802-1866) なる人物であるが、元々時計職人であったクインビーは、1833 年に結核に罹患して世を憐むものの、乗馬による適度な運動とメスメル派の動物磁気療法によって結核が快癒したことから、病気というのは、結局、心の状態が生み出す虚構に過ぎず、実体としては存在しないものである、という確信を抱く。また彼は、聖書の記述にあるイエスの奇跡はすべて病気の治療であり、イエスは「健康の科学」(クインビーはこの「科学」を指して「キリスト」と呼んだ) によって患者の心から「病気」という概念を取り除き、健康になりたいと願わせることによって治療したのであって、イエスに倣ってこのキリストの原理を用いさえすれば、人類をあらゆる病から救うことができる考え、実際に自ら診療所を開いて患者の治療に当たり、そこで多くの人々が健康を取り戻したという。そしてクインビーの治療

によって病気から快復した患者の一人であるメアリー・ベーカー・エディー (Mary Baker Eddy, 1821-1910) が、クインビーの思想を引き継ぐ形で「クリスチャン・サイエンス」を創設、「健康の科学」の実践を開始することになる。³

クインビーがスウェデンボルグの著作を読むなどして、両者の間に直接の影響関係があったかどうかは不明であるが、しかし、「神に選ばれなかった大半の人類が地獄に落ちる」といったようなキリスト教の言説がもたらす恐怖心が人間の潜在意識の中に入り込んで凝り固まったものがいわゆる「腫瘍」であり、その恐怖心から解放してやりさえすればその凝り固まりも氷解するのであって、実体としての病気などというものは存在すらしない、というクインビーの考え方は、明らかにスウェデンボルグの思想の延長線上にあるものであり、また来世よりも現世での健康・幸福を重視した点も両者は共通する。そして真の神は霊的なものであり、従来キリスト教が教える人格神は人間が勝手に作り上げた架空の暴君に過ぎず、そうしたありもしないものに対する恐怖から人類を解放しようとした点で、クインビーの思想は明らかにニューソートの範疇に入るし、それを病気の治療という実践的な行為を通じてアメリカに根付かせるのに大きな役割を果たしたのである。

人間の意識には顕在意識と潜在意識の二種類があり、潜在意識に巣食った悪い概念を取り除けば健康になれるとしていた点で、クインビーはジグムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) の先駆であると言うこともできるし、アメリカのプラグマティズム哲学の祖となるウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842-1910) もまた、クリスチャン・サイエンスの治療によって神経症を治した経験から、その哲学体系には少なからずニューソートの影響が見られると言う。⁴ このように間接的な影響というところまで視野を広げれば、後世に対して決して小さくはない影響を残したクインビーであるが、ここで今一度確認しておきたいのは、彼の思想の中に「病を恐れる人間の恐怖心が腫瘍へと凝固する」という考え方があるということである。本論冒頭で述べた自己啓発本の主張、すなわち「人間の思考が宇宙を満たすエーテルに働きかければ、それはモノとなってその人の元に引き寄せられる」という特異な発想の萌芽が、クインビーの病気概念の中に既に明確に現われて

いることは明らかだろう。

「ニューソート系ライター」としてのエマソン

クインビー／クリスチャン・サイエンスと並び、19世紀後半のアメリカにおいてニューソートが徐々に広まっていく、そのもう一つの道筋として、ここでラルフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) のことにも触れておこう。

キリスト教の宗派の中でもイエスの神性を認めない宗派として知られる「ユニテリアン派」の聖職者の家庭に育ったことなど、エマソンがニューソートに接近していく素地には生まれながらのものがあつたわけだが、実際、長じてからスウェデンボルグの影響を強く受けたエマソンの著作には、ニューソートの傾向が色濃く出ている。試みに初期の代表作である『エッセイ (第一集)』(Essays, 1841) に収録された「自己信頼」(“Self-Reliance”) や、「大霊」(“The Over-Soul”) から任意の一節を引いてみよう：

後天的に授けられるものを教育というのに対し、この根源的な知恵は「直感」と呼ばれる。この奥深い力、どんなに分析しても明らかにしえない究極の事実の中に、万物の起源がある。

穏やかな気持でいるとき、なぜかはわからないが、魂の中に実在の感覚——自分はあるゆるものや空間、光、時間、人間と異なるものではなく、一体であり、それらの命や存在と同じ源から生じているという感覚が湧きあがってくる。私たちが最初は万物を支えている命を共有しているが、やがて人間以外のものをたんなる自然現象と見なし、自分も同じ大本から生まれたことを忘れてしまう。

すべてのものは祝福された「一なるもの」に帰する。これは今回の主題にかぎらず、何について論じるときも、すぐに導きだされる究極の事実だ。なんの支えも必要とせず、ただそれ自体として存在することは「万物の根源」の性質であり、あらゆるものの価値は、この性質をどれだけそなえているかによってはかられる。⁵

魂のあらゆる活動をとおして人と神が合一するさまは、言葉につくせない。どんなに卑しい者も、誠実さを賭けて神に祈るなら、神になるのだ。しかもこのよりよい、普遍の自己は、いつまでも永久に流れ込み、たえず新しく、はかりがたい。それは驚異と畏怖の念を呼びさます。⁶

人間が「一なるもの」の一部であり、ゆえにこの世に存在するあらゆるものと等価であって、またその「一なるもの」から与えられた「直観」という力を使えば神と一体化することも可能である——このようなエマソンの諸言説の中に、ニューソートの匂いを嗅ぎ取るとは容易であろう。「超絶主義哲学」の唱道者にして「汎神論的無神論者」というようなレッテルを貼ってしまえば、何か神秘的で難解な思想の持主であったかのように見えるエマソンも、スウェデンボルグの神秘思想を平明な散文詩の形に翻訳して広くアメリカの民衆に伝えた「ニューソート系ライター」の一人と見做せば、案外理解し易いところがあるのだ。

「引き寄せ系」自己啓発本の誕生

だがエマソンの思想の真の影響力というのは、実はその先にある。エマソンが講演や著作の中で語るニューソートの言説がさらに俗転し、その俗転した言説が19世紀末のアメリカに広く流布していくのである。

もともとニューソートの思想には、俗転し易いところがあった。本論でも縷々述べてきたように、「神は霊的な存在で、宇宙のすべてを満たしており、人間もモノもその一部である」といったニューソートの神学思想は、そこに少しばかりの想像力を加えながら敷衍していけば、「宇宙に存在するすべてのものはエーテル状の「原質」から成り、人間が思考をもってそのエーテルに働きかければ、それがモノに変化して引き寄せられてくる」という考え方に転じるのであり、またそうであれば、そこから更に「人間はよりよい状況を思い描くことによって、その望み通りの状況を引き寄せることができる」という考え方、つまりは今で言うところの自己啓発思想が生まれてくるのも頷ける。そして「人間の生涯というのは神とか運命によって左右されるものではなく、自分の考え次第で自由に変えられるし、そうである以上、勝者とし

て素晴らしい人生を送るのも、敗残者としての人生を送るのもすべては当人の責任である」という自己啓発思想特有の考え方は、「ポジティブ志向」と「自己責任」という二つの側面において、アメリカ人の一般的な精神志向によく合っていたのだ。

そして、ニューソートから派生した自己啓発思想の立場から顧みれば、エマソンの著作は、自己啓発思想の正当性にお墨付きを与え、それを後押ししてくれそうな片言隻句に満ちていたのである。その例として、ここで再びエマソンの文章を幾つか挙げてみよう。

生き生きとした思考はそれを描くパワーをもたらす。その源の深さに応じて、それを投射する力が発揮される。⁷

人とは、その人が一日考えていることそのものである。⁸

(人間は) 大いなる秘密を学びつつある。それによって、一つの事象ばかりではなく、もっと大きなもの、いや、いくつかの連続した事象すら思いどおりにでき、事実をことごとく自分の考えに合わせられるのだ。⁹

心は何も考えなくても、素早くパワーに変わり、有効な手段を組織する傾向がある。¹⁰

実はここに挙げたエマソンの文章は、後世の自己啓発本ライターたちがエマソンの著作から引用したものを更に引用したものなのだが、背景となる文脈から切り離されたエマソンの文章は、それ自体、今日世に数多出回っている自己啓発本の常套句とほとんど変わらない。だからこそ後の時代の自己啓発ライターたちはこぞってエマソンを引用するのであり、またそうやって無限に引用され続けることによって、エマソンは今日なお、自己啓発思想の巨人として読み継がれているのだ。

自己啓発本ブーム

このように、本人が意図したかどうかは別として、作家として、また講

演者として、非常に尊敬されていたエマソンが後ろ盾となったこともあり、19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカでは「自己啓発」という概念が定着し、それと共にいよいよ自己啓発本の最初のブームが生じてくることになる。そしてそれらの自己啓発本の多くが「理想の環境を思い浮かべれば、それが現実となって引き寄せられてくる」というニューソート直系タイプのもの、いわゆる「引き寄せ系自己啓発本」であったことは言うまでもない。

そしてその種の引き寄せ系自己啓発本を書いた代表的な著者としては、例えばプレントイス・マルフォード (Prentice Mulford, 1834-1891) であるとか、『富を手にする「ただひとつ」の法則』(*The Science of Getting Rich*, 1910)の著者ウォレス・D・ワトルズ (Wallace D. Wattles, 1860-1911)、ウィリアム・W・アトキンソン (William Walker Atkinson, 1862-1932)、『ザ・マスター・キー』(*The Master Key System*, 1917) を著したチャールズ・F・ハアネル (Charles F. Haanel, 1866-1949)、ラルフ・ウォルドー・トライン (Ralph Waldo Trine, 1866-1958)、アーネスト・ホルムス (Ernest Holmes, 1887-1960) などの名前が挙がるし、この他にもイギリスの自己啓発思想家トーマス・トロワード (Thomas Troward, 1847-1916) や『「原因」と「結果」の法則』(*As a Man Thinketh*, 1903) で名高いジェームズ・アレン (James Allen, 1864-1912)、さらにトロワードの弟子でフランス生まれながらアメリカで活動したジュヌヴィエーヴ・ベーレン (Genevieve Behrend, 1881-1960) などの著作も、アメリカではよく読まれていた。

ちなみに、この時代の引き寄せ系自己啓発本の中では「引き寄せの力をビジネスに活かし、金持ちになるにはどうしたらいいか」ということが説かれていることが多く、その意味で今日の「ビジネス系自己啓発本」の原点のようなどころがある。アメリカ19世紀末と言えば、前述した「金ぴか時代」に続く時代であり、鉄鋼王アンドリュー・カーネギー (Andrew Carnegie, 1835-1919) のように一代で財を成した人たちが沢山いた。それだけに「自分も成功者になりたい」という願望が当時のアメリカ人の間には潜在的にあって、それがビジネス系自己啓発本の流行につながったのではないかと推測されるが、その推測があながち的外れではないと思われるのは、20世紀のIT王ビル・ゲイツ (William Henry Gates III, 1955-) もまた、ハーバード

大学での学生時代にチャールズ・F・ハアネルの著作に出会って奮起し、その後の成功を勝ち取ったとされているからである。¹¹ 19世紀末の自己啓発ライターが説く「引き寄せの法則」は、100年経った後でも実際に通用したのだ。

拡散する自己啓発思想

そしてこの第1次自己啓発本ブームは、その後ほとんど途切れることなく第2世代（20世紀半ば）、第3世代（20世紀末～21世紀初頭）へと受け継がれていくことになる。そして自己啓発本というジャンル自体が100年を超す伝統を築き上げていく過程で、その内容も幅広いものとなり、必ずしもビジネス上の成功や財産形成ばかりを目的としたものではなくなっていく。自己啓発思想そのものが、時代につれて多様なものとなっているのだ。

例えばジョセフ・マーフィー（Joseph Murphy, 1898-1981）やネヴィル・ゴダード（Neville Goddard, 1905-1972）、あるいはオーストラリア生まれのロンダ・バーン（Rhonda Byrne, 1945-）など、第1世代の衣鉢を継ぐ正統進化型のビジネス系自己啓発ライターや、キリスト教色が強いという意味で、これもある意味正統進化型の自己啓発ライターであるノーマン・V・ピール（Norman Vincent Peale, 1898-1993）やジョエル・オステーン（Joel Osteen, 1963-）がいる一方、20世紀後半に入ると、スウェデンボルグ由来の神秘思想をさらに押し進めた「スピリチュアル系自己啓発思想」も登場してくる。この系統のライターとしては、来世の人々と交信しながら宇宙の仕組みを説くエスター・ヒックス（Esther Hicks, 1948-）の名前が第一に挙がるだろうが、日本の江本勝（1943-2014）もこの系統に属する。江本は、水に話しかけたり音楽を聴かせたりすると水の性質が変わり、結晶も変わることを実証したとされ、「人間の思考がモノに影響を及ぼす」というニューソート／自己啓発思想の基本概念を科学的に初めて立証したことで、少なくともアメリカの自己啓発界では高く評価されていて、彼の主著『水からの伝言』は彼の地でベストセラーになっている。¹²

ちなみに、スピリチュアル系の自己啓発本のすべてがこの種の「色物」というわけではなく、例えば1962年にマイケル・マーフィー（Michael Murphy,

1930-) と デリック・プライス (Richard Price, 1930-1985) によってカリフォルニア州ビッグサーに設立された「エサレン研究所 (The Esalen Institute)」は、「人間としての真の充足」とか、「心の平安の獲得」ということをスピリチュアルな方面から追求している団体であり、「ニューエイジ」とも呼ばれる「スピリチュアル系自己啓発思想」の原点の一つであると同時に、1960年代のカウンター・カルチャーの拠点の一つでもあった。現代の人気自己啓発ライター、パム・グラウト (Pam Grout, ?-) もここの出身である。

また人間の心の在り方を追求する自己啓発思想という意味では、東洋思想に影響を受けた自己啓発ライターたちのことも、ここで言及しておかなければならない。

例えば、第1世代に属する自己啓発ライターとして先に名前を挙げたウィリアム・W・アトキンソンはアメリカに「ヨガ」を導入した人としても知られているが、もともとニューソートというのは、特定の人格神を措定せず、万物皆同源という考え方をするので、その意味ではヨガをはじめ、東洋思想全般と相性がいいところがある。1950年代のアメリカで鈴木大拙(1870-1966)の禅の思想がアメリカで流行するのも、その背後にニューソートの影響があったのではないかというのは、現時点では論者の単なる推測に過ぎないが、いずれにせよ「ヨガ・禅・仏教系」の自己啓発本が目指すのはビジネス上の成功というよりも心の平安の獲得であり、そういうものとして根強い人気を誇っている。またこの種の自己啓発思想は日本人にもアピールするところがあって、例えば中村天風(1876-1968)はアメリカで学んだニューソートとインドで学んだヨガを日本に持ち帰り、「天風会」を設立してそれらを伝えているし、¹³ 谷口雅春(1893-1985)が創始した宗教団体「生長の家」は、世界最大のニューソート組織として知られている。キリスト教のバックグラウンドこそないものの、向上心に富み勤勉な国民性を持つ日本人とニューソート／自己啓発思想というのは、実は相性がいいのだ。

また「ヨガ・禅・仏教系」の延長線上にあるものとして、今、ニューソートと仏教がミックスした「マインドフルネス (mindfulness)」という思想が人気を呼んでいて、ベトナムのティク・ナット・ハン (Thich Nhat Hanh, 1926-) などが代表的な唱道者であるが、これもまた心の平安を求める自己

啓発思想として、アメリカ・イギリス・日本のみならず、「ビジネス系自己啓発本」があまり普及しないフランスなどでも人気を呼びつつある。

さらに自己啓発ライターの中には自己啓発思想を物語として、すなわち小説仕立てで書く人もいて、その系統で言えば、古くは『ぼろ着のディック』(*Ragged Dick; or, Street Life in New York with the Boot Blacks*, 1868)をはじめとする数々の少年向け立身出世小説をものしたホレイショ・アルジャー (Horatio Alger, Jr., 1832-1899) や、『目覚めよ！生きよ！』(*Wake up and Live*, 1936) などのベストセラーを書いたドロシア・ブランド (Dorothea Brande, 1893-1948) がいるし、もう少し新しいところでは『世界最強の商人』(*The Greatest Salesman in the World*, 1968) を書いたオグ・マンディーノ (Og Mandino, 1923-1996) や『若きミリオネア物語』(*The Instant Millionaire*, 1990) で知られるマーク・フィッシャー (Mark Fisher, 1953-) がいる。またリチャード・バック (Richard Buck, 1936-) のベストセラー『かもめのジョナサン』(*Jonathan Livingston Seagull*, 1970) も、「スピリチュアル系自己啓発思想」を小説仕立てで表現したものと解釈すると理解し易いところがある。日本で言えば、水野敬也の『夢をかなえるゾウ』(飛鳥新社、2007年)がこの系統に属すると言えれば分り易いだろう。

別系統の自己啓発本

さて、ここまで自己啓発本の系譜の中でも特にニューソート由来の「引き寄せ系」と、その発展形である「スピリチュアル系／ヨガ・禅・仏教系」の自己啓発ライターたちを紹介してきたわけだが、実は自己啓発本の系譜はこれだけではない。実はニューソートとはまったくルーツを異にする自己啓発思想／自己啓発本というのも存在しており、それはそれで長い歴史を持っているのだ。

例えば、偉人や成功者の人生を振り返り、そうした人たちの特異な言動の中に成功の秘訣を求めようとするタイプの自己啓発本がある。仮にこれを「成功哲学系」と名づけるのであれば、この系統の歴史は古く、その起源を辿って行けば、アメリカ建国の父の一人、ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin, 1706-90) にまで遡る。彼の『自伝』(*The Autobiography of*

Benjamin Franklin, 1771-90) や、その自伝の中で言及された「13 の徳目」 (“13 virtues”)、あるいは『貧しいリチャードの暦』(*Poor Richard's Almanack*, 1733-58) といった著作は、「誰でも向上心をもって生活を律していけば、いずれ必ず成功することができる」と主張している点で、ニューソート由来の引き寄せ系自己啓発本とは成り立ちこそ異なるものの、ジャンルとしては明らかに自己啓発本のカテゴリーに分類せざるを得ないのだ。

そしてこの系統を継ぐライターと言えば、「引き寄せ系自己啓発本」の第1世代のライターたちとほぼ同世代のオリソン・スウェット・マーデン (*Orison Swett Marden*, 1850-1924) の名前をまず挙げなければならない。『前進あるのみ』(*Pushing to the Front*, 1894) なるベストセラーをものし、1897年以來、今も続く自己啓発雑誌『成功』(*Success*) を創刊したことで知られるマーデンは、先に名前を挙げた中村天風が教えを乞うた人物でもある。またブッカー・T・ワシントン (*Booker T. Washington*, 1856-1915) の自伝『奴隷より身を起こして』(*Up from Slavery*, 1901) も、自分自身の成功体験を基に、同胞に向けて地道な生活改善の努力の重要性を訴えかけている点で、アメリカ黒人による最初の「成功哲学系自己啓発本」と認定できるし、『バビロンの大富豪』(*The Richest Man in Babylon*, 1926) で名高いジョージ・サミュエル・クレイソン (*George Samuel Clason*, 1874-1957) もこの系統に属する自己啓発ライターであるが、そんな彼らよりも遥かに大きな影響力を持っていたのが、『思考は現実化する』(*Think and Grow Rich*, 1937) を出版して自身財を成したナポレオン・ヒル (*Napoleon Hill*, 1883-1970) と、これもまた全世界で1500万部の売り上げを誇る『人を動かす』(*How to Win Friends and Influence People*, 1936) の著者として有名なデール・カーネギー (*Dale Carnegie*, 1888-1955) の二人である。20世紀半ば以降に活躍したアメリカの政治家・実業家で彼らの影響を受けていない人を探す方が難しいほどの成功哲学の大家であるが、その影響力があまりにも大きいため、この二人に関してはまた稿を改めて述べることにする。

その他では『信念の魔術』(*The Magic of Believing*, 1948) の著者として知られるクロード・M・ブリストル (*Claude M. Bristol*, 1891-1951)、ナポレオン・ヒルの影響を受け、大手保険会社社長としても成功したW・クレメ

ント・ストーン (William Clement Stone, 1902-2002) 、それにアール・ナイチンゲール (Earl Nightingale, 1921-89) やデニス・ウェイトリー (Denis Waitley, 1933-) 、ボブ・プロクター (Bob Proctor, ?-)、『小さいことにくよくよするな』 (*Don't Sweat the Small Stuff – and it's all Small Stuff*, 1997) がベストセラーになったリチャード・カールソン (Richard Carlson, 1961-2006) 、さらに今挙げた W・クレメント・ストーンの影響を受けてベストセラー『こころのチキンスープ』 (*Chicken Soup for the Soul*, 1993) の共著者となったジャック・キャンフィールド (Jack Canfield, 1944-) など、この系統の自己啓発ライターも枚挙に暇がないし、また日本でもベストセラーとなったスティーブン・コヴィー (Stephen Richard Covey, 1932-2012) の『7つの習慣』 (*The 7 Habits of Highly Effective People*, 1989) なども大きく見れば「成功哲学系自己啓発本」の範疇に入れられるだろう。

さらに日本との関連で言えば、サミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles, 1812-1904) の *Self-Help* (1859) についても触れておかなければならない。スマイルズはアメリカではなくイギリスの自己啓発ライターであるが、才覚と努力次第で誰しも偉業を成すことができるということを実在の偉人たちの生き方を例に説いたこの本は、明治4年に中村正直によって『西国立志篇』 (別訳名『自助論』) として邦訳されるや、明治維新によって士農工商の身分制度から解放され、人々の間に出世欲が蔓延していた当時の日本で総計100万部が売れたという。またそのことに関連させて言うならば、福澤諭吉の書いた『学問のすゝめ』 (1872-76) や新渡戸稲造の書いた『修養』 (1911) なども、ジャンルからすれば明らかに「自己啓発本」であり、その意味では日本の近代化の思想的バックグラウンドに自己啓発思想があった、ということも可能なのだ。

すべては人間の心から

ところで、ここまで「自己啓発本」と呼ばれるジャンルの本を、便宜的にニューソート系自己啓発本 (引き寄せ系／スピリチュアル系／ヨガ・禅・仏教系) と非ニューソート系自己啓発本 (成功哲学系) に分けて解説してきたわけだが、片や「人間の思考の持つエネルギーで、宇宙を満たす可塑的なエ

一テルに働きかける」ことを推奨するニューソート系自己啓発思想と、片や「実際に社会で成功した人たちを見習う」ことを推奨する非ニューソート系自己啓発思想では、その主張の質がまるで違うように思われるかも知れない。

しかし、必ずしもそうではないのである。例えば非ニューソート系自己啓発本ライターの代表として前述のナポレオン・ヒルを例に挙げると、彼が何百人もの実在の成功者をインタビューした上でまとめ上げた成功哲学のエッセンスを一言で表せば、「成功を勝ち取る上で一番重要なのは、目標を明確に定めることだ」ということになる。だが、それは換言すれば「人間が明確に定めた目標は必ず実現する」ということであり、そうなるそれはニューソート系自己啓発ライターたちが異口同音に主張する「人間が強く心の中で思ったことは、必ず実現する」という言説と一致してしまうのだ。

実はここが自己啓発思想／自己啓発本を語る上で一番興味深いところなのだが、ニューソート系と非ニューソート系、どちらの道筋を辿って行っても、究極的には「人間の思考は現実化する」という結論に至るのである。しかも、この究極の結論を、歴史上、最初に提示した「偉大なる師」こそイエス・キリストである、とする点でも両者は共通する。何となれば、イエス・キリストは今から 2000 年も前に「求めよ、さらば与えられん」(『マタイによる福音書』7 章 7 節) なる言い回しで、この究極の結論を喝破していたのだから。自己啓発本の系譜という観点から言えば、『(新約) 聖書』こそ、世界最初の自己啓発本なのだ。

「自己啓発」という思想

以上、「自己啓発本」なる文学ジャンルについて、その系譜を急ぎ足で概観してきたが、本論冒頭でも述べたように、一見すると非常に奇妙であり、また浅薄な言説のように見えながら、その実、歴史的に見れば、自己啓発思想の大本のところにはニューソートなる思想があり、またそのニューソートが生まれた背景には、キリスト教の教義、とりわけカルヴァン派の教義が持つ過酷なまでの禁欲主義に対する人間サイドからの反発というものがあつたわけで、そのように考えれば、そこには『神本位』に生きるか、それとも『人間本位』に生きるか」という非常に大きな問題があることが自ずと明らかに

なってくる。

そしてニューソートが時代を経て「自己啓発思想」へと俗転するや、それはキリスト教世界の枠すらも越え、人間が人間の可能性を追求していこうとする際の強力な後押し之力となって世界中の野心家たちを鼓舞し、その結果として様々な分野で発展があったわけだし、またそうしたチャレンジに敗れて疲れた人々には、「スピリチュアル系／ヨガ・禅・仏教系」の自己啓発本が慰撫の手を差し伸べてきたことを考えれば、この度外れた「ポジティブ思想」を、単なる子どもじみた幻想として軽視することなど誰にもできない。否、そればかりか、ベンジャミン・フランクリンとラルフ・ウォルドー・エマソン、ホレイショ・アルジャーと福澤諭吉をひとまとめに論じる視点となり、アメリカの独立や日本の近代化の原動力となり、メスメル派の動物磁気療法からフロイトの精神分析への橋渡しとなり、ヨガや禅やマインドフルネスの流行を通じてキリスト教と仏教の接点となり、金儲け主義の蔓延とスピリチュアル・ブームを同時に論じ得るような、そんなユニークかつ包括的な立脚点があるとしたら、それは「自己啓発思想」以外にはないのではないか。

はじめに述べたように、自己啓発本はアメリカで、そして日本でも数多出版され、しかもその多くがベストセラーになるものの、その内容の奇妙さゆえか、いまだ本格的な文学研究の対象にはなっていない。しかしこの特異な文学ジャンルにそれだけの幅と奥行きが本当にあるのだとすれば、それに応じた研究の進展・深化というものが今、求められていると言ってもいいはずである。

注

- 1 ミカエル・セルヴェトゥスに関しては、マーチン・A・ラーソン著『ニューソート その系譜と現代的意義』（日本教文社、1990年）、第1章の記述に拠った。
- 2 マーチン・A・ラーソン著『ニューソート』第2章を参照せよ。
- 3 マーチン・A・ラーソン著『ニューソート』第3章及び第5章を参照せよ。

- 4 ウィリアム・ジェイムズとクリスチャン・サイエンスの関係については、バーバラ・エーレンライク著『ポジティブ病の国、アメリカ』（河出書房新社、2010年）、106頁を見よ。なお、ウィリアム・ジェイムズの父で神学者のヘンリー・ジェイムズ・シニアがスウェーデンボルグの研究者であったことも付け加えておく。
- 5 ここに挙げたエマソンの「自己信頼」からの引用2点は、ラルフ・ウォルドー・エマソン著『自己信頼』（海と月社、2009年）47-48頁、及び60-61頁から取った。
- 6 ここに挙げたエマソンの「大霊」からの引用は、平石貴樹著『アメリカ文学史』（松柏社、2010年）87頁から取った。
- 7 チャールズ・F・ハアネル著『ザ・マスター・キー』（河出文庫、2012年）172頁。（一部改訳）
- 8 ノーマン・V・ピール著『積極的考え方の力』（ダイヤモンド社、2012年）194頁。
- 9 バーバラ・エーレンライク著『ポジティブ病の国、アメリカ』（河出書房新社、2010年）98頁。
- 10 チャールズ・F・ハアネル著『ザ・マスター・キー』（河出文庫、2012年）282頁。（一部改訳）
- 11 チャールズ・F・ハアネル著『ザ・マスター・キー』（河出文庫、2012年）371-372頁にある「訳者あとがき」を参照せよ。
- 12 江本勝氏に対する評価については、パム・グラウト著『こうして、思考は現実になる』（サンマーク出版、2014年）200-202頁を参照せよ。
- 13 中村天風とニューソート及びヨガとの出会いについては、中村天風（述）宇野千代（著）『中村天風の生きる手本』（三笠書房、2007年）に詳しい。

（本稿は、平成27年11月21日に日本アメリカ文学会中部支部で行なった口頭発表「アメリカにおける自己啓発本の系譜」を元に、加筆修正を加えたものである。）